

## 六月十九日

福岡市東区 天野 清文

今年もまた6月19日が近づいてくる。昭和20年(1945)から数えて50回目を迎える。

私にとって、この日は消したくても消すことのできない苦しい思い出の日として、胸中深く刻まれているものがある。それは、この日の夜半に起こった米軍による福岡大空襲に起因する。16年12月8日に始まった米・英を相手とする太平洋戦争は、長期化していた中国戦とともに、その戦局はわが国に不利で悪化の一途を辿るのみであった。20年4月1日の米軍の沖縄本島上陸以降、本土決戦が叫ばれるようになってからは、学校に於ける軍事教練も益々厳しさを増してくるし、登校時刻頃は毎日のように艦載機の空爆に見舞われ、防空頭巾は体から離せなくなった。

私は当時中学1年生で福岡市の冷泉地区に住んでいた。多くの友が次から次へと疎開していく中で、敢えて疎開もせず、父祖伝来社家を務める櫛田神社の境内に住み、神社を守ってきた。

午後11時過ぎ、眠りばなを轟く爆音と警報を知らせるサイレンで起こされた。外を見ると西南部方面の空が、いやに明るい。それは、既に空襲による火の手だった。家族5人は急いで着替え、非常食(乾パン)やタオル、三角布を入れた救急袋を身に着けて外へ出た。父は神社の御神体を安全な場所に移すため神殿に向かった。神社の裏手に御神体安置用の防空壕があった。私は父に同行し協力したい気持ちを抑え、怯える小2と4才の弟の面倒を見るため、母の側にいることにした。わが家用の防空壕は、縦3m・横及び深さ1m程度の粗末なものを屋外に壕っており、そこへ避難した。

上空にはB29、221機(当初は100機くらいと思っていた)が3機ずつで編隊をなし、雨か霰のように焼夷弾を落とすのが見える。地上、あるいは空中で炸裂するともものすごい炎が上がる。焼夷弾はヒュルヒュルと鈍い音をたてて落下し、探照灯に浮き出るB29の鮮やかな銀色の機体が今でも脳裏に残る。延々と続く爆撃は約1時間余り。日本の高射砲弾は命中せず、なされるままにじっと上空を見上げていた。周囲がめらめらと燃え焼け落ちる地響きが伝わり、焦臭い匂いにタオルを手洗所で濡らしてきてマスクにした。旧博多部は築港から丘部へと南下し、境内から道一つ隔てた母校の冷泉国民小学校が見る見るうちに焼け落ちた。火の粉が熱風で吹き飛んでくる。電柱も木煉瓦の道路も燃えている。その中を、沢山の罹災者達が神社へと逃げて来ている。平常の夜間は閉門しているのだが、こんな事も予測して父は開門しておくよう私に命じていた。わが家の狭い防空壕も大入り満員だが、境内にはざっと100人以上はいた。昼間のように明るい空は福岡市各所が焼けているように見えた。一睡もしないまま夜が明けた。神社の門前まで焼けているのに、不思議と神社は焼失を免れた。

門前までは行けるが余燼と余熱で殆ど動けない。乾いた喉を潤して、やや治った時点で土居町方面へと歩く。目前はまさに瓦礫の山、電線は垂れ落ちショートしているし、くすぶる木煉瓦の異様な匂いが鼻に付くし眼も痛い。日頃は見えない志賀島が眼前に迫る。櫛田神社から築

港まで焦土と化し一眼で見渡せるのだ。残骸は鉄筋ビルのみ。途中で黒焦げ屍体を見つけた時は震えおののいた。警察へ届けた後の朝食は喉を通らなかった。

ある程度鎮火した後、罹災してない家庭の中学生以上に召集が掛かった。冷泉校区は三分の二以上が焼失していたし、どこかへ避難した人も多く、集まりが悪かった。十数人ほどの中学生と消防警防に在郷軍人、町内役員有志で約30人程いただろうか。作業できる服装、頭巾に濡れタオルを持って来るよう聞いていたので、今から何をするか予測はついていた。焼跡片付けである。中学生3~4人と大人2人で班を作り、担架やゴム手袋が配られた。私達の班は上土居町、古小路、店屋町、西町等を回ったが、見つかる屍体は逃げる途中で倒れた人達が大半で、そのすごい形相には眼をそむけたかった。担架に乗せたくても安定性が悪く、屍体を支えるのに苦労した。強制疎開で空き地になった所が安置所になった。途中で他の班の人から十五銀行（現西銀博多支店）の地下に多くの犠牲者がいるとの情報が入った。昼食後はそこに応援に行くこととなる。長靴を履いて来るよう言われたが、集合時間に集まった中学生は私の班では私一人だけ。それで中学生は免除の指示もあったが、一人の人手も欲しい声を聞いた時、自分の意志で参加する決心をした。土居町周辺には多くの友達がいたからだ。

地下に入ってみてのショックは、真に心臓も止まりそうだった。この世の地獄絵を眼のあたりににしたからだ。足下に溜まっている水と思われたものは、なんと蒸し焼きになった人達の油だった。どろどろぬるぬるしたのを汲み出すのが学生に与えられた任務。地下室の一室に収納されていた地下足袋の焼けた臭いと相まった悪臭（犠牲者の方には申し訳ないが）は、今でも頭に残る。断末魔の叫びが聞こえるみたいだ。300m程離れた冷泉小横の消防会館横の空地まで運ぶのは、苦痛と言うより至難の業を要した。免疫のない学生達は次から次へと脱落していった。私は死体安置所に張り巡らされた幕の外で、茫然とたちすくんだ。中学1年の精神力では無理だったのだ。同級生の一家族全滅の死体があることを聞いた時は、驚がくのあまり、背中に冷たいものが走った。同学年の女子の家族だった。ここでの死体は、63名にのぼったと聞いた。死体確認に数日を要した。私の自宅から50m程の所で、初夏の太陽にさらされた犠牲者は余りにも気の毒だったし、浜風が運んでくる臭いも大変だった。

現在の日本には戦火がない事だけを考えれば平和である。ハルマゲドンを訴え布教活動に利用される程平和であるということか。平和が50年間続き、世紀末が近づけば末法思想を説く人も出よう。それは新しい世紀への期待と不安があるからだろう。しかし、この50年間続いた平和ゆえ、価値観も多様化し、自由に物が言えるようになったこの世は有難い。さらに勤勉性が造り出した経済大国、これらの現象を築いたのは戦火に生き残った現代人達である。しかし、戦場であるいは銃後で亡くなった人達の尊い犠牲があった事だけは忘却してはならない。戦争の悲惨さ、罪悪感を後世に語り継ぎ伝えていくのは戦時下を経験した者達の使命なのだ。

結局、私は神職の道を選ばず教職についた。

教壇上から生徒達に平和の貴さを教えてきた。戦争経験者の高齢化で語り部が少なくなった今、その使命は教壇に立つ者の責務となってきた。教師達が学ぶべき事をきちんと学んでこそ、平和教育も推進され未来に対する期待も膨らんでくるものと思う。